

「うたかたの記」に於ける「即興詩人」の投影

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 田人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4857

「うたかたの記」に於ける「即興詩人」の投影

大 島 田 人

獨逸南部拜焉國首都民顯府近郊ヴェルム湖の悲劇、北部普魯西國首都伯林に於ける瘦小慧敏の一舞妓との交渉、中部索遜國第十二軍團機動演習への参加、王宮への伺候や宮廷舞踊會、フォン・ビュロウ家やパウル・スネットゲル家等、上流社會の諸媛との接觸等、獨逸滯留中鷗外が直接間接見聞或は體驗した出來事を素材として執筆した「うたかたの記」、「舞姫」、「文づかひ」……所謂留學記念の三部作のすべてに、彼の青春の浪漫的心情が色濃く投影して哀愁の色調を漂わせているが、「舞姫」と「文づかひ」が共に歸朝後間もなく彼の身邊に生じた事件……前者はエリスの來日、後者は「狹布の細布」故の登志子夫人との離別……を苦惱した彼の心情を背景として推測させるのに對して、「うたかたの記」の「巨勢」には、「弱き心」の「太田豊太郎」や「快活の氣象」で機敏な「相澤謙吉」の俤もなければ、「文づかひ」の主たる「小林士官」乃至當の「眉頭常に愁を帶」びた黒衣の女性「イ、ダ姫」のそれも窺れない……民顯府滯在中偶々起つたワグナーのパトロンとして知られた厭人癖の狂王ルウドキと第二世のヴェルム湖に於ける水死（自殺）という、歐羅巴の王族の歴史にも稀有な、それだけにその當時から様々の揣摩憶測を生んだシヨツキングな事件に絡む悲戀物語というかたちで構成されている點、前掲

の二作とは大いに趣きを異にしている。「うたかたの記」に筆を染めるべく彼に技癢を感じしめたものは、事件そのものが極めてドラマテイツクであることと、悲劇の舞臺となつたヴェルム湖に遊んだ日々の思い出であり……それはまた彼自身の若き日の追憶の數々を抒情豊かに語る縁よすがともなつたのである。

彼のヴェルム湖行の契機が狂王の水死事件であつたことは獨逸日記の次の記事に徴して明らかである……

明治十九年六月十三日。夜、加藤(照磨)、岩佐(新)とマクシミリアン街 Maximilian-strasse の酒店に入り、葡萄酒の杯を擧げ、興を盡して歸りぬ。翌日聞けば拜焉國王此夜ウルム湖の水に溺れたりしなり。王はルウドキヒ Ludvig 第二世と呼ばれる。久しく精神病を憂へたりき。晝を厭ひ夜を好み、晝間は其室を暗くし、天井には星月を假設し、床の四圍には花木を集めて其中に臥し、夜に至れば起ちて園中に逍遙す。近ごろ多く土木を起し、國庫の疲弊を來し、が爲めに、其病を披露して位を避けしめき。今月十二日の夜、王は精神病専門醫グツデン von Gudden と共にホフヘンシュワンガウ Hohenschwangau 城よりスタルンベルヒ湖 Starnbergersee に近きベルヒ Berg と云ふ城に遷りぬ。十三日の夜王グツデンと湖畔を逍遙し、終に復た遷らず。既にして王とグツデンとの屍を湖中に索め得たり。蓋し王の湖に投ずるや、グツデンはこれを救はんと欲して水に入り、死を共にせしものなるべし。屍を検せしもの、謂へらく、グツデンは王を助けて水を出でんと欲し、其領を握みしならん。グツデンの屍は手指を傷け、爪を裂きたり。されど王の力や強かりけん。哀衣は醫の手中に残り、王は深處に赴きぬ。醫は追ひて王に及び、水底にて猶王の死を拒みし如し。グツデンの面上には王に抓破せられたる癍痕ありと。慘も亦た甚し。王の未だ病まざるや、人王の徳に詩客の才を兼ね、其容貌さへ人に勝れ、民の敬愛厚かりしが、西洋の史乘にも例少き死を遂げしこと、哀む可きに非ずや、グツデンは特に精神病の醫たるのみならず、平生神經中心系の學に暗熟し、鳴世の著述あり。又詩賦を好む。其狂婦の歌人口に膾炙す。其死も亦職責を重んじたる跡分明にして、永く杏林に美名を赫すに足る。

二十七日（日曜）。加藤岩佐とウルム湖に遊び、國王、グツデンの遺跡を弔す。舟中ペツテンコオフエル師と其令孫とに逢ふ。

三十日。朝公使及姉小路伯を送りて停車場に至る。午後近衛公、加藤、岩佐とウルム湖に遊ぶ。近衛公加藤と角觚の戯を作す。其相對するの状を見るに、公は身短くして肥え、加藤は長くして、瘦す。觀者皆笑ふ。已にして加藤を攫み、一間許りも投げ出したり。其膂力想ふ可。加藤は是より數日間頭痛に苦みたり。是より余公と競走を爲す。余敗北す。然れども角觚と違ひ、頭痛だけは免れたり。

ヴェルム湖畔には民顯府大學で初めて衛生學の講座を拓いた彼の師ペツテンコオフエルの別莊があつたことも彼をこの湖にひきつけた縁の一つであつたろう。また、グツデンのことに就いては、明治二十四年七、八月「衛生療病志」第十九、二十號に掲載した「ロオベルト・コツホが傳」でも「精神病學者にはルウドキヒ・マイエル Ludwig Meyer 及び、ノオ・レストレン療 (No-restraint) を獨逸國に輸入したる譽にて、グツデン、グライジンゲル、エストフアル Gudden, Griesinger Westphal の三大家と併稱せらる。」とある。グツデンの人口に膾炙する狂女の歌というのが氣になるが、鷗外も特にそれを紹介していないし今のところ詳かにしない。

それから三ヶ月後の九月二日から二週間餘も、避暑傍ら讀書と著述を目的に滞留しているが、思ひは尙亡き狂王と任に殉じた侍醫の上に及んで詩賦をものしている。かゝることは彼の日記を尋ねても他に例をみない。鷗外のこの件に寄せた感懷の程が察知されるし、彼の創作の素材としてこの悲劇を最先に採りあげた所以も亦首肯されよう。

二日。午前十一時より三浦とスタルンベルヒに遊ぶ、舟を泛ぶ。

望斷鷓山城外雲。詞人何事淚紛々。艙窓多少綺羅容。不憶波間葬故君。

又詩各々一首を作りて路易二世と侍醫屈顛とを詠ず。

當年向背骸群臣。末路悽愴泣鬼神。功業千秋且休問。多情偏是愛詩人。路易二世。

埋骨烏湖萬頃波。爛心高節動人多。平生著作足千古。別有一篇狂婦歌。屈顛。

レオニイ Leoni にて舟を下り、小憩す。郵便局あり。端書を長松篤業に寄す。

渺茫烟水接天開。鷗鷺眠邊醉倚臺。湖上風光無限好。扁舟憐汝不同來。

又纜を解いてスタルンベルヒに歸る。舟中日暮れたり。賦して三浦に示す。

相逢不忍還分手。一去從斯路更賒。日落波間遠巒沒。只餘離恨滿秋湖。

三日。三浦リンダウ Lindau に向ひて發す。送りて發車場に至る。三浦別に臨みて歸郷後千住の君を訪はんことを約す。

此夕獨り汽車に上り、スタルンベルヒに達し、拜焉客舍 Bayerischer Hof に投じたり。殘暑を避け、兼ねて著述する所あらんとするなり。初夜湖畔を逍遙す。岸の常夜燈に夏蟲の幾萬となく集れるを見る。

四日。水に枕める石級上に朝餐す。蒸餅の餘れるを投ずれば雀許多來り啄む。日出の景えも言はれず。舟にてレオニイに至り、此に午餐す。夜天陰る。星處々に見ゆ、太だ涼し。

五日。此處は汽車の往復繁く、喧しきことミュンヘンの居より甚しければ、便船してレオニイに赴き、「レオニイ」客舍

Gasthof Leoni に投ず。湖畔の小園、栗の木蔭を成し、頗る意に適す。「チゴイネル」族の群あり。熊を引き來りて避暑の客を慰む。此民は盗すとて人々忌み嫌へども、其衣服など雅致ありて面白きものなり。日暮近郊を歩す。岸のあたりは水清く、底なる砂石數ふ可し。客舎に近き漁家、皆壁に神像を畫く。舊教の風然るなり。小淺き處に家を建つ。床なし。婦人の游泳する處なりといふ。人工の甲蟲能く自ら動く者、護謨の絲を附けたる毬など賣る翁あり。一ツ二ツ買ひて兒童に與ふ。九時過るまで月を看て庭上に座す。

六日。朝驟雨過ぐ。長松ドラツヘンフェルス Drachenfels に在りて書を寄す。原田岩佐等の書も亦至る。

七日。好天氣なり。ロットマン丘 Rottmannshoeh に登る。途に一人あり。二兒を曳いて來る。余を呼びて曰く。君は一等軍醫某君に非ずやと。蓋し拜焉參謀本部の幕僚なり。既にして丘上に達す。客舎あり。結構其美を極む。碑あり。其銘の略に曰く。畫工カル・ロットマン Karl Rottmann 會て此丘に登り、喚びて湖上第一勝と作すと。ロットマンはハイデルベルヒ Heidelberg の人。千八百五十年ミュンヘンに終る。畢生力を寫景に竭すと云ふ。碑の傍に小苑あり。薔薇花盛に開く。

八日。陰。冷氣膚に透る。又ロットマン丘に上る。ダイフェンバハ Diefenbach の兒に客舎の前に逢ふ。ダイフェンバハは畫工にして所謂素食家 Vegetarianer なり。その素食法を奉ずること極めて嚴にして、髮を斷らず、爪を除かず。身には一枚の綿布を纏へるのみ。其子も亦父親と同じ生活を營めり。余兒に薦むるに檸檬水を以てす。辭して飲まず。時に樓上の窓を啓いて鐸を鳴す者あり。仰ぎ見れば即ちダイフェンバハなり。兒走りて舍に歸る。ダイフェンバハは豆眼紅鬚、身は瘦

せたれども、衰弱の色は見えず。歸途丘の半腹にて榻上に横臥すること半晌。對岸スタルンベルヒの人家歴々數ふ可し。

九日。朝雨。家書至る。

十日。晴。歩してアムメルランド、アムバハ Ammerland Ambach に至る。

十一日。晴。湖邊に坐し、書を読む。

十二日。晴。舟を湖上に泛ぶ。大尉アウグスト・カル、August Kati 夫妻及其兒アルベルト Albert と相識る。夫人は明色の人にして、身の長余より一歳高きが、順良なる人なり。

曾て伊國に遊びしことなどありて、談話いと面白し。殊に話エネチヤ Venezia に及びしときは、稱揚口を絶たず。余書中にて讀みしことを擧げて之に質すに、答ふる所整々として據あり。アルベルト Albert は余に馴れ、余と相逢ふ毎に、延いて母の許に至る。曰く。盍ぞ又伊太利の事を話せざるやと。大尉は此日ミュンヘンに歸れど、妻と兒とは猶レオニイ Leonii に留ると云ふ。客舎は余と同じ。

「……殊に話エネチヤに及びしときは、稱揚口を絶たず。餘書中にて讀みしことを擧げて之に質すに、答ふる所整々として據あり。……」の條で、鷗外が讀んだ書物とは Italienische Reise か Improvisator か、大いに關心が持たれるが、この邊りの事については後で詳述する。

十三日。晴。日本家屋論第二稿略々整頓す。

十四日。加藤歸府の報あり。駁拏^{オウマン}鳥菡論の稿を起す。是は他日世に公にする意あれども、成否は未だ知らず。リツヒヤルド・スタイン Richard Stein と云ふ兒余が室を訪ふ。其父母姉妹と暑を避けて此地に在り。慧敏愛す可し。妹ヘレエネ Helene も亦可憐兒なり。居はミュンヘン府マツフエイ Maffei 街に在りと。

十五日。風雨。冷甚し。

十六日。雨。アルベルト母とミュンヘンに歸る。相訪問する約あり。居はシュワアンタアレル街にて余が家を距ること遠からず。

十七日。晴。昨日の雨にて客多く去りし故、此朝食堂に入りしときは、余と一婦人其侍婢と二人のみなり。婦人は中尉の妻にて貴族なりと人の云ふを聞きしが、此時余に詞を掛けたり。名はドオリス・フォン・ヴォオドケ Doris von Woedtke とて、家はミュンヘン府ゼンドリング門達 Sendlingsthorplatz に在りとぞ。余に借すに稗史數卷を以てす。曰く歸府の後返されんも可なりと。

十八日。陰。ミュンヘン府に歸る。

十月末に到つて三度同湖を訪れてその秋色を愉んでいるが、この日原田直二郎が一行に加わっていることは注目される。

二十三日。天氣好し。土曜日。午後加藤、原田、濱田、岩佐と會す。加藤の發意にてスタルンベルヒ湖に遊ぶ。舊酒亭をレオニイ村に訪ふ。秋色満目、墮葉路を蔽ひ、夏日の綺羅場と同じとは思はれず、蓬頭荆釵の主婦出で、余を迎ふ。曰く。「ドクトル」復た來れりと。纔に前遊の夢幻に非るを悟る。

鷗外のヴェルム湖行は十一月に入つても尙一度、更に伯林に向けて發つ五日前にも今一度訪ねて名残を惜んでいる。この間、同湖周邊の名勝古跡の殆どを見盡したかに想われる。

十一月十三日。丹波敬三ブタペスト Budapest に往きし歸途此に立ち寄り、此日土曜に當るを以て、余等を訪ひてレオニイに遊ぶ。汽車のスタルンベルヒに達するや、馬車二輛を雇ひ、湖を環りてレオニイに至る。酒を呼びて興を盡し、此に泊す。

十四日。朝レオニイ客舎に在りて夢醒む。同行者皆眠る。余咖啡一盞を喫し畢り、歩してロットマン丘の左なる小寺院に至る。避暑遊の時未だ見るに及ばざりしを以てなり。右邊亞爾伯山を望む。曙光と相映じ、其美言はん方なし。午時舟を命じて歸る。諸氏は猶午後の興を失はじとて留まれり。丹波余を送りて馬頭に至る。舟の遠かるを見、手巾を振ひて別意を表す。勿ち足を失して水中に墜つ。幸にして水淺く、傷くこと無かりき。

明治二十年四月十一日。中濱、濱田、岩佐とスタルンベルヒ湖に泛ぶ。

「自作小説の材料」(明治三十年十一月「新著月刊」)の中に次の様な條がある……「……ルウドキヒ王の事は、私が獨逸にゐる頃、芝居に作ったものがありました。(註 Ludwig der Zweite, König von Bayern……五幕十二場)是れは……「レクラム」本になつて出ました。獨逸人(註 Ludwig Klinger)の作で、極めて拙劣なものでした。此れが妙く出來てゐれば、まさか同じ材料を使う氣にもならなかつたが、餘りまづいから、詰り遠慮なしに使つたんですね。……」

この芝居を觀たという記事は日記には見當らない。「レクラム」本で脚本を讀んだだけであろうか。「極めて拙劣なものでした」という口吻からは、彼が狂王の事件を扱つた芝居というので大いに期待していたのにという失望と、自分ならもつといいものに仕上げてみせるという自負がその時點に於いてあつた、ということは、「うたかたの記」は留學中に構想されていたと忖度できるのではないか。

ルドウキヒ二世の謎の自殺事件に就いては、「ヴェルレエヌやゲオルゲが詩に歌い、ビョルンソン、ダヌンツイオが戯曲で扱おうと試み、モオリス・バレスが小説のなかで言及し、アポリネエルが奇抜な短篇の主人公として屢々彼を登場させた。コクトオも、ダリも、終始この王に對する關心を捨てなかつた。」その他、「悲劇の王を扱つた通俗小説、通俗映畫にいたつては枚擧に違がないほどである」と澁澤龍彦氏はその著「狂王」の冒頭に書いているが、鷗外の「レクラム」本の脚本も「枚擧に違がないほど」ある通俗作品の中の一つであつたらう。

拜焉の狂王のことは鷗外の日記や「自作小説の材料」の中でも、その概略を知ることのできるが、「うたかたの記」の内容分析の上で今少し詳細な解明の要があると思われるので先程擧げた澁澤龍彦氏の著書や故久生十蘭氏のそれ等に據つて調査を進めてみた。次に略述するのはその纏めである。

拜焉王國に君臨していたヴィテルスバハ家は、九世紀、カルル大帝時代からの南獨逸の名門で、ルウドキヒ二世はその直系であるが、拜焉王國そのものは、一八〇六年、ルウドキヒ二世の曾祖父に當るマクシミリアン一世がナポレオンに封ぜられて以來のことである。ヴィテルスバハ家は美術の爲には如何なる出費をも惜しまない情熱的な美の畏敬者や鑑賞家として傑出した人物が相繼いで國政の座に就いた。彼の祖父ルウドキヒ一世もその一人で、首都民顯府を藝術の都に仕上げる上に力を盡したが、その情熱がアイルランド出身の舞妓ロオラ・モンテスとの色戀に注がれるや、王にあるまじき醜聞として市民の糾弾するところとなり、一八四八年退位をよぎなくされたことは餘りにも有名である。このロマンスに取材した通俗小説や映畫もこれまでに數多くつくられている。

次に即位したその子息マクシミリアン二世は保守的な寡黙の人であつたが、ホオエンシユヴァンガウ城を建て、普國のホオエンツォレルン家出身の彼の王妃は二人の王子……ルウドキヒ二世とその弟オットーを生んだ。(オットーは兄の跡を繼いで、一九一三年まで在位したが、彼もまた發狂、生涯宮廷奥深く檻禁の身であつたと云うから、狂氣は、この家系に纏りついた不吉な惡靈とでも云う可き惡質遺傳と思われる。)彼の從祖母の娘に當る人で、アドリア海やエーゲ海を船旅したり、チロルの山城に閉じこもつたりして氣儘な孤獨の生活を樂しんでいたオースタリーの皇妃エリザベートは、モオリス・パレスから「孤獨の皇妃」と渾名された文學趣味の美貌の女性であつたが、その閉鎖的厭人的な生活振りから推すと彼女も亦ルウドキヒ二世に似た憂鬱症にとり憑かれていたらしい。この二人は親交があり、彼の狂氣が酷くなつてからも文通があつた由。彼女もこの呪われた一族としてその悲運から免かれることはできず、最期は彼女の近親者のそれと共に悲惨を極めたものであつた……彼女の義弟は殺害され、義妹は發狂、彼女の息子は自殺、その妹ゾフィーはルウドキヒ二世の許婚者で、婚儀の仕度も整い、式の日取まで決まっていたのに、彼の方から之という理由も示されることなく破談の憂目をみた。彼女は後にアランソン公の夫人になつたが、巴里の慈善市の火災で焼死。しかもエリザベート自身もコクトオの悲劇「双頭

の驚」の背景として畫かれている通り、ジュネーブのレーマン湖畔に滞留中、伊太利の無政府主義者ルツケーニに暗殺されたのである。

ルウドキヒ第二世は、一八四五年八月二十五日、民顯府近郊に聳え立つ後期バロック風の美しいニユンフエンブルグ城に誕生したが、その幼年時代の教育はホオエンシユヴァンガウ城で授けられた。美しいアルプスの景觀に圍饒され、文字通り白鳥の湖近くに建てられたこの城での彼の教育は、その浪漫的環境とはうらはらに殆ど修道院の日常にも等しい巖しく形式的なものであつたと云われる。

ルウドキヒの狂氣の種子を發芽させる契機となつたものは、一八六一年、十六歳の時、民顯府劇場でワグナーの「ローエングリン」の樂劇を観たときの感動であつたと澁澤龍彦氏は主張する。「幻影が舞臺の上で現實となる奇蹟を初めて」彼に教えたのはワグナーである……彼こそルウドキヒを狂氣に追い遣つた元凶であるというのだ。確かに、「ローエングリン」や「タンホイザー」の夢幻の舞臺は、この精神的未熟兒を醜く恐ろしい現實から逃避させる遮蔽幕としての役割を果たしたに相違ない。

青春期を迎えると、彼にはホモの性癖が現れた。當初の相手は王子の副官を務めた若い貴族の近衛士官パウル・フォン・ドルン・ウント・タクシス公。この副官が醜聞を恐れて身をひいた後、即位一年後の一八六五年にはエミール・ローデという俳優を伴つてスイスの山々を旅行して世界中に噂をまき散らしたが、ワグナーに初めて會つた時から三年後に當る一八六七年の五月、ベルクの館で若い馬丁リヒアルト・ホルニヒを見て以來、二人の關係は實に二十年近くも續いたのである。ゾフィーとの婚約を破棄したのもこの時である。「女性」はもはや彼にとつて恐怖と不安をもたらす以外の何ものでもなかつたのである。「童貞王」の渾名もこの頃から生じた。従つて、「うたかたの記」でルウドキヒがマリイの母に挑みかかる好色漢に仕立てられているのはこの事實とは相違するわけだし、厭人癖の彼が、少數の側近者と歌手以外に入ること許されな

かつた冬園で夜會を催すことはあり得ない。但し、王の性的倒錯については、彼の生前から噂されていたもので、結局は、一部の賣文の徒の捏造にすぎないとして、これを否定する向きもあるが。(小堀桂一郎氏「うたかたの記」)

彼はワグナーの樂劇に出てくるような時代離れをした城の建設をいくつも計畫したが實現したのは未成も含めて二つである。この城に就いては、湯川秀樹博士が猶逸西南端のリンダウで開催されたノーベル賞受賞者達の講演會に招かれて、ポーン湖に臨んだ静かなホテルに滞在中、ロビーで、雪をいただいたチロルの山々を遠景として湖に臨む緑深い山々の中腹にそそり立つ眞白な城を寫した大きな美しいポスターを見て、リンダウから餘り遠くないことを知り、汽車で現地に行つてみたときの印象を、「うたかたの記」の讀後感と関連させて次の様に記している……山道を馬車にゆられてしばらくゆくと、期待していたとおりのノイ・シュワンスタインのお城が眼の前にあらわれた。白鳥のお城の名にふさわしく、今できたばかりのように、くつきりと緑の木立の中に立つている。大勢の觀光客と一しよに城の中の階段を上つてゆく。色彩も鮮やかな壁畫や天井畫で飾られた室が、つぎつぎとあらわれてくる。案内者の説明によると、ルドウイツヒ二世は、ワグナーの音樂の非常な愛好者であつた。ワグナーが王に招かれて、この城に滞在した時の部屋というのものもある。ここで歌劇の作曲をしたとも傳えられている。各部屋の壁畫や天井畫も、ほとんど皆ワグナーの歌劇の場面を描いたものである。ローエングリンの部屋もタンホイザーの部屋もトリスタンの部屋もある。それらの物語の中でも、王は特にローエングリンが好きで、自分自身白鳥の騎士であると夢想するようになった。王は一つの城では満足せず、つぎつぎと豪華な城を作つた。その後、リンダーホーフという城へいつてみたが、これもたいへん美しい城であつた。しかし、城作りのために、財政は窮乏し、領地の人たちは租税に苦しめられることになつた。王の精神状態もだんだん變になつていつた。結婚もせず、一人で白鳥の城の中に閉じこもつてしまつた。ババリア政府の人たちは、王を別の城へ連れてきて幽閉した。そこへ移つて數日後に、王は主治醫と一緒に湖で最期をとげることになつてしまつたのである。

王は、現實の世界から完全に遊離したロマンチックな夢の世界に生きようとした。それは現實の世界における破滅を結果とした。中世的な城を十九世紀になつて、いくつも新らしく作ろうとしたことは、甚だしい時代錯誤でもあつた。ところで王の溺死が鷗外のドイツ滞在の中でできごとであつたことは、今度「うたかたの記」を読みかえして、はじめて知つた。一方では古風な城が作られたのがそんなに近い時代のことであつたかといふかり、他方では明治二十年とはそんなに遠い昔であつたかと驚いた。……」

湯川博士の感想は極めて示唆に富んでいる。「現實の世界から完全に遊離したロマンチックな夢の世界に生きようとして、**「現實の世界において破滅」**した王は確かに**「甚だしい時代錯誤」**を犯しはした。併し、澁澤氏の言葉を借用すれば、**「満たされるはずのない全能を、狂氣をもつて贖おうとした一個の魂は、何はともあれ偉大」**だということになる。そうして、**「十九世紀末の多くの藝術家が熱烈な思慕をこめて數々のオマージュを捧げた」**のも、この**「狂氣」と「藝術家の直觀」**——**「狂氣」**とが共鳴したからだということになる。

ルウドキヒ二世の生涯とその周邊を探ぐることによつて、私は**「藝術家の狂氣」**ということをはき出した。そうしてこれをプロジエクターとして**「うたかたの記」**を照射してみたところ次の行文が浮かんで來たのである……**「をりくは我身、みづからも狂人にあらずやと疑ふばかりなり。これにはレオニーにて讀みしふみも、小し崇をなすかとおもへども若し然らば世に博士と呼ぶる人は、抑々いかなる狂人ならむ。われを狂人と罵る美術家等、おのれが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂氣なくては慚はぬことは、ゼネカが論をも、シエクスピアが言をも待たず。見玉へ、我學問の博きを。狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見る、その悲しさ。狂人にならでもよき國王は、狂人になりぬと聞く、それも悲し。悲しきことのみ多ければ、晝は蟬と共に泣き、夜は蛙と共に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情なくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心のゆくままに語るを咎め玉ふな。嗚呼、かくいふも狂氣か。……」**

巨勢がアトリエでマリイから身の上を打明けられる條の一節である。マリイの口を藉りて藝術家の狂氣を説く鷗外もワグナーの樂劇に憑かれて破滅の淵に沈んだ狂氣のルウドキヒの姿を思い浮かべていたのであろう。

それにしても、侍醫の必死の制止も振り切つて湖中に歩み入る程の衝動を王に與えたものは一體何だつたのだらう。それは事件當時から様々に取沙汰され、様々な推測を生んだ。そうして永遠の謎とされた。事件直後のヴェルム湖を訪ねて故人の冥福を祈つた鷗外とても例外ではあるまい。加藤篤麿や岩佐新達ともこの事を語り合つたであらう。王の發狂は口實で、拜焉王家を撓る宮廷内部の暗闘と内閣の陰謀の犠牲者とする説もあつた。(註六月十五日の新聞「Münchener Gemeinde」の號外。……この説は、後に事實であることが確認されている。)
「國庫が憂うべき状態になり、余があれほど執着していた城の建築が中止されて以來、余の人生の主要な楽しみは奪われてしまつた」と王は死の年、一八八六年の初めにこう記している。彼は築城の夢を容易に捨て切れず、聴き容れられなければ自殺するとも口走つた。とにかくどうにかして築城の資金を調達しようと試みたのである。「拜焉國を賣つても……」とまで思い詰めた彼であつた。だから、單純ではあるが、失意が王を自殺に追い遣つたという推論も成り立つのである。六月十日、ルイトポルト公の名によつて王の統治權が停止され同公による攝政權樹立の布告がなされたことで、王が激怒し、これを伝えきいた村民も蹶起したので、ホーエンシュワンガウに向かつた同公の使節が生命の危険にさらされたという事實もまた「失意」の自殺説を裏付けるものであらう。そうして、王は湖の汀を徒渉、庭園の柵の外側に出て、そこに待たせてあつたエリザベート皇后差向けの馬車に救いとられることになつていたとする脱走説も出てくるわけである。一九一三年、湖畔に滞留した長壽吉(歴史家、九大教授)も、老漁夫から聞いた話として、脱走説を記録している。「東西南北人」だが、それでは悲慘に過ぎる。興味本位の週刊誌の読みものにはなるだらうが、悲劇の舞臺となつたヴェルム湖の風光は、この悲慘を悲慘として許容するには餘りに浪漫的である。鷗外もおそらくそう考えたのではなからうか。

この狂王の悲劇を組み込んで浪漫的な哀感の漂う物語に仕上げるためにはどうしてもこの悲劇に繋がって行くロマンスを用意しなければならぬ。それにはヒーローもヒロインも藝術の世界にかかわりを持つ矢張狂氣に憑かれた若者達でなければならぬ。だが自分はこの物語のヒーローとはなり得ない。「舞姫」では「太田豊太郎」は悲劇の渦の中心に据えなければならぬ。「文づかひ」では首座を「イムダ姫」に譲りはしたが「文使」という脇役でも顔を覗かせなければ義理が立つまい、それが「うたかたの記」では全く要らないのである。彼が舞臺の片隅にでも立つてはこの物語は成立しない。この物語に關する限り彼は舞臺に立たねばならぬ必然性はない。ここに恰もその頃 Akademi の畫房を借りて熱心に畫を學んでいた「原田直二郎」が登場するのである。

原田との交渉が日記に顔を出すのは、「畫工原田直二郎を其藝術學校 Akademiestrasse の居に訪ふ。直二郎は原田少將の子なり。油畫を善くす。」という明治十九年三月廿五日の記事が最初である。鷗外の來府が七日だから二週間目に當る。以後原田に關する記事が頻々と現れ交渉の親であつたことが察せられる。

二十九日。原田、加藤照磨及岩佐と Amaliestrasse なる伊太利酒店 (Joseph Wisintainer) に到り、「キアンチ」Chianti を飲み「ポレンタ」Polenta を食ふ。「ポレンタ」は伊太利人の常食にして、我米飯に伯仲す。余は黒兒そぼがきの如き者ならんと想ひしに、火の中てたるもの故、少しく堅く、味餘り美ならず。

八月十五日。原田直次郎妾宅をランドエルストラアセ Landwehrstrasse にトす。妾名はマリイ Marie フウベル Huber 氏。會て「ミネルフ」骨喜店 Café Minerva の婢たり。容貌甚だ揚らず。面蒼くして羸瘦す。又才氣なし。兩人の情は今膠漆にも比べつ可し。原田の會て藝術學校に在るや、チエチリア、プファツフ Caecilia Pfaff といふ美人あり。エルラン

ゲン Erlangen 府大學教授の息女なり。鰲髮雪膚、眼鏡く準隆し。話は英佛に通じ、文筆の才も人に越え、乃父の著作其手に成る者半に過ぐと云ふ。余未だ親く其人に接せざれども、曾て其圖を原田の家に見るに、才氣面に顯れ、女中の大丈夫たること、問はでも知らるゝ程なりき。此女子藝術學校に在りて書を學ぶ際原田と相識り、交情日に墮く、原田の爲めに箒を執らんと願ふこと既に久し。然れども原田は毫も動かさるゝこと無きものゝ如くなりき。而るに今や此一小婢の爲めに家を營む。余は怪訝せざることを得ず。蓋し原田の意、チエチリイは良家の女なり、若しこれと約せば一生の大事なり、マリイは旗亭の婢なり、以て一時の歡を爲すに足るといふに在らん。抑々チエチリイの如き才女と婚を約すると、マリイの如き才なき婢と通ずると、執れか快く執れか快からざる。且チエチリイは資産あり。嘗て原田と俱に私財を擲ちて巴里に遊學せんと議したりと云ふ。マリイの父母は貧婁甚し。他日の紛紜恐らくは免れ難からん。要するに原田の所行は不可思議と謂ふべし。原田は素と淡きこと水の如き人なり。余平生甚だこれを愛す。故にその此の如き行あるや、余又甚だこれを惜む。

二十日。原田、岩佐と「グリユウンワールド」Gruenwald (Dachauerstrasse) に晚餐す。

三十一日。原田直二郎マリイを携へて、ミツテルワールド Mittelwald に赴く。避暑を兼ねて景を寫さんと云ふ。三浦守治伯靈より至る。別後の情を話す。

九月六日。朝驟雨過ぐ。長松ドラツヘンフェルス Drachentfels に在りて書を寄す原田岩佐等の書も亦至る。

十月一日。夜原田直二郎マリイとコツヘル Kochel より、レエマン伯林より歸る。

九日。原田を訪ふ。その作る所のミツテンワールド及コツヘルの圖を觀る。近衛老公、岩佐、濱田等の肖像半ば成れるものあり。

十一月二十一日。大尉カルゝの家にて午餐す。夜ヲルフ Wolf の旗亭に會す。原田直二郎を送るなり。愛妾マリイも亦た侍す。原田の遺兒を妊めり。

二十二日。午前七時十五分原田を送りて停車場に至る。原田は瑞西を経て伊太利に赴き、佛蘭西より舟に上ると云ふ。

右に擧げた十一回に及ぶ記事のうちで、八月十五日の、「カフェ・ミネルワ」の醜婢マリイ・フウベルとの同棲を、彼を片戀する大學教授令嬢で才貌兼美のチエチリア・プファツフと對照させてその愚を説く鷗外の分別臭い原田批判のモノローグの末尾に現れる「淡きこと水の如き」彼の性情を鷗外がいたく愛していたこと、十月二十三日の、原田を交えてヴェルム湖に遊んだこと（前出）、十一月二十一日の「愛妾マリイ」が原田の「遺兒」を胎内に宿していたことなどが特に注目される。

歸朝後も原田とは彼の家族共々親交があつた。このことは、原田逝去に際して東京日日新聞（明治三十三年一月）に寄せた追悼文「原田直二郎」や、明治四十二年、故人の友人門弟が主宰して組織された原田の記念會發足に當つて國民新聞（十一月二十七、八日）に寄せた談話「原田の記念會」、「再び原田の記念會に就いて」、また、明治四十三年一月に同會から刊行された「原田先生記念帖」や「原田の記念會餘談」等の内容からも十分にそれと推察される。「原田先生記念帖」に收録された彼の年譜も鷗外の手になるものである。

鷗外が愛した「淡きこと水の如き原田の性情を「原田直二郎」では「自然兒」或は「一つの可憐なる蠻兒」に譬え、

「再び原田の記念會に就いて」の中では「夢を見る人」とも評しているが、執れも、彼がその生涯を通じて權威に阿ねず、時流に倣わず、「恬澹無慾」、世俗的な榮達や利殖に拘泥することなく、野人としての姿勢を終始崩さなかつたことへの讃辭である。殊に「原田直二郎」を起草した時は小倉左遷の直後であり、我が身の上にひき較べて感慨無量なるものがあつたことは、當時小倉から東京の賀古鶴所に宛てた書簡の行文がそれを物語つてゐる。

原田の畫風に就いても鷗外は共鳴する所が多かつた……「彼はモニユメンタルな大作を志して居たが、日本にはその腕をふるう壁面がない。」そこで、一般向きの「パノラマを藝術の境に押し上げること」を着想したり、「パノラマの事に就きて某に與ふる書」(つき草)の「某」とは原田のことであろう。日本赤十字社の病院を青山に築くや、院中の御座の間の壁面を油畫の皇后の御像を以て飾ろうとの企畫が立てられたが、無智な社吏がその選に残つた原田等三人に前以て鉛筆畫の御像を提出せしめ、その出來榮に據つて最終の決をなそうとした時、原田一人敢然としてこれを拒み候補たることを辭したり、展覽會に前例なき油畫の觀音像を出品して觀者を愕かせたり、「(原田直二郎に與ふる書) 柵草紙第十二號・明治二十三年九月二十五日) 寫生は「まだ藝術ではない。只だ藝術を築き上げる石に過ぎない。」「それよりも一層高いもの」を望んでいたこと等、彼のオマージュの猶創性とその反骨精神を高く評價して、所謂「夢見る人」の「狂氣」をその畫風に認め、しかも彼は黒田清輝や久米桂一郎等の寫實派に先行して西洋の油繪法を日本に紹介した油畫界に於ける文字通り先達の立場にあり、しかも歐羅巴のそのの如く「十五世紀以來の油畫に許多の成功があつて、人心これに倦んで、一種の風潮を催し出した」のではなく、「まだ油畫の成功」がなく「油畫でその局勢の稍や大いなるものは、唯だ原田などの胸中に萌芽して居たに過ぎ」ず、而も黒田、久米等氣鋭の諸畫伯が直ぐ後から押し上げて來て忽ち舊派の仲間には追い込まれてしまつたことに對しても、鷗外自身の醫學界と文壇に於ける經歷に鑑みて大いに同情を寄せているのである。

「うたかたの記」の巨勢のモデルが原田であることは「自作小説の材料」によつて確認されているが、「かの少女をライ

ンの岸の巖根に居らせて、手に一張の琴を把らせ、嗚咽の聲を出させ」「下なる流にはわれ一葉の舟を泛べて、かなたへむきてもろ手高く擧げ、面にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには數知られぬ、『ニツクセン』、『ニユムフェン』などの形波間より出で、擲擧す」という「ロオレイ」の畫葉もまた「干潮」のパノラマの構圖、「騎龍の觀音」「素錢鳴尊」「大江山入の圖」等、ハルトマンの所謂「空想假象」に叶つた彼の畫風に徴すれば如何にも原田らしい趣向である。要するに原田は巨勢のモデルとして恰好な人物だつたに相違ない。

「巨勢」の名は故松原純一氏の説く様に「巨勢金岡」から、「マリイ」は原田の愛妾「マリイ・フウベル」から採つたのであろう。「エキステル」も原田と同學の「ユウリウス・エキステル」のことで、後に「南獨逸の新派畫家中屈指の名士」になつたが、「その頃は世間に名を知られる人とも思わなかつた」ので實名を使つたのである。（「自作小説の材料」）「舞姫」に出てくる好色の座頭「シャウムベルヒ」は加藤照磨の下宿の主人の名であつた。マリイの父の姓「スタインバハ」も拜焉國の宮廷畫家「カウルバハ」に據つたものと想われる。

「マリイ」は「マリイ・フウベル」から出たものであろうが、その才貌兼美と「パワーリアの女神」とも見紛う女丈夫振りには先輩諸氏が既に説かれている通り「チエチリア・プファツフ」のそれを當てたものであろうし、實父を著名な宮廷畫家としたのも、チエチリアの父の身分からの發想であらう。尙マリイの雄辨は「エリス・スネットゲル」のそれから思いついたものではなからうか。原田の愛妾が彼の「遺兒」を妊んでいたことは、これを「舞姫」に譲つてゐる。兎に角、「マリイ」は「エリス」や「イ、ダ姫」と共に鷗外好みの女性であり、就中「マリイ」は「うたかたの記」のヒロインたるに相應しい。

ヴェルム湖を背景に巨勢とマリイの語らいを書き出すには、同湖に原田等と遊んだときの思い出が役立つたであらうと思われる。雨天下の湖の風光も彼自身これを目の當りにしていることは日記に畫かれてゐる通りである。

窮状にある女性が未知の男から救われたことが緒いとちになつて、その女性の運命の絲が手繰られるという手法は、この三部作に共通して使われているし、遠く「雁」の「お玉」と「岡田」の出逢いにも及んでいる。これが小説作法としては類型的であることは、「自作小説の材料」で鷗外も「うたかたの記」から一年餘後に出た「埋木」の作者の「トオデル・フィリング」の構想が「うたかたの記」のそれと酷似していることに一驚していることでもそれと判るが、これは「翻譯」人の一生・飛行機』の廣告文に『彼は建築家、此は發明家、並に慘酷なる運命の手に弄ばるゝは一なり。』と書き、『意地』の廣告文では『佐橋甚五郎』について『その一代の奇しき運命の物語』と書いた鷗外、『ギョツツ』の廣告文でも『ギョツツは此墮落腐敗の犠牲となりて必ず滅亡すべき運命を有せる人物なり』とし、『身上話』のそれにおいては『刹那に一女性の運命を云々』と誌した鷗外』を思えば、『運命』といふ言葉が單に俗耳に入りやすいからといふ理由以上に、重んじられてゐるやうにも思ふ』という岸田美子氏の解釋とも關連して面白い課題になりそうである。

だが、それが「うたかたの記」のようになかちで再會するということになるやうな類型を通り越してメルヒエンめいてくる。「うたかたの記」の筋書があまり都合よくできすぎている、不自然だといふ譏もこゝら邊りから出て來るのである。「エリス」との再會は鷗外が戀愛も「普請中」の日本に歸つて後のことだったので、それ自體ロマンスにはなり得なかつたし、「小林士官」と「イ、ダ姫」は、最初の出逢から約半年後に宮廷舞踊會で邂逅しているが、「小林士官」は所詮物語の渦中の人たる立場にはいかなかつた。「岡田」は「無縁坂」の「お玉」ともう少しといふ所まで行きながら、「上條」で出された「青魚の味噌煮」が「釘一本」の役を果して二人の次元が違つてしまつた。だが「カフェ・ロリアン」に於ける最初の出逢から六年の歳月を隔てて所も同じ民顯府の「カフェ・ミネルワ」で再會する「巨勢」と「マリイ」は大分趣を異にしている。「宮媛中」一人の甚だ舊相識に似たるものあり。然れども敢て言はず。忽ち余を顧みして曰く。何ぞ君の健在なると。嗚呼、余之を知れり。是れ野營演習中相見たる所のフォン・ピュロオ氏の一女にしてイイダと名づくるものあり。奇遇と謂ふ

可し。」という具合にすんなりとはいかない……「餘所には男客のみなるに、猶こゝには少女あり。今エキステルに伴はれて來し人と目を合はせて、互に驚きたる如し。來し人はこの群に珍らしき客なればにや。また少女の姿は、初めて逢いし人を動かすに餘あらむ。前庇廣く飾なき帽を被ぶりて、年は十七八ばかりと見ゆる顔ばせ、エヌスの古彫像を欺けり。そのふるまひには自ら氣高き處ありて、かいなでの人と覺えず。」と一應外しておいて、今を去る六年前、「カルネツル謝肉の祭はつる日、」の夕、「ピナコテエク」の館を出た巨勢が立ち寄つた「カルフエエ・ロリアン」で逢つた「舊びたる鷹匠頭巾、ふかぶかと被り、凍えて赤うなりし兩手さしのべて、」「常磐木の葉、敷き重ねて、その上に時ならぬ藁の束を、愛らしく結びたるを載せ」た「淺き日籠の縁を持」つて、「ファイルヘン・ゲフェルリヒ」と「清き聲」で、「うなだれたる首を擡もあへでい」つた「十二三と見ゆる女の子」のことを巨勢が語り出したとき、「マリイは物語の半より色をたがへて、目は巨勢が唇にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯さへ一たびは震ひたるやう」であつた……巨勢も「初此まとゐに入りし時、己に少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きはれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたず是れなりと思はれ」たが、「こも例の空想のしわざなりや否や」と思い惑う程に、「物語畢りしとき少女は暫し巨勢を見やりて、『君はその後、再び花うりを見たまはざりしか、』と問う……「巨勢は直ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが。『否。花賣を見し其夕の汽車にてドレスデンに立ちぬ。されどなめげなる言葉を咎め玉はずばきこえ侍らむ。我すみれうりの子にもわが「ロオレライ」の畫にも、をりくたがはず見えたまふはおん身なり。』」と今度はきわどい所まで持つて行く……と、「少女、「さては畫額ならぬ我姿と、君との間にも、その花うりの子立てりと覺えたり。我を誰とかおもひ玉ふ」と「起ちあがりて、眞面目なりとも戲なりとも、知られぬ様なる聲にて。『われはその堇花うりなり。君が情の報はかくこそ。』」と、「卓越しに伸びあがりて、俯きゐたる巨勢が頭を、ひら手にて抑へ、その額に接吻」する。……あなやと思うと、マリイの言葉や振舞を「いみじき戲」ととつた畫學生達が、「自分達を繼子にするな」と彼女に戯れかゝるのを「さては禮儀知らずの繼

子どもかな、汝等にふさはしき接吻のしかたこそあれ」と叫び、「少女の腰をかき抱」いていた側の男の手を「ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稲妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨」む。……「巨勢は唯呆れに呆れて見」ていたが、「この時の少女が姿は、董花うりにも似ず、「ロオレライ」にも似ず、さながら凱旋門上のパワリアなりと思はれ」たと、再び三度つき放して尙巨勢を戸惑わせておき、中の章に到つてはじめてマリイが六年前の董花賣の娘であることが、彼女の身上話を通じて明らかになる……大變手が込んでいる。このマリイがまた彼女の母に生き寫しで、かつて彼女の母……その名も同じマリイに云い寄つてその夫に遮られ、以來狂氣も激しさを加えていたルウドキヒが巨勢と共にヴェルム湖に舟を泛べるマリイを彼の意中のそれと見て湖中にいるという舞臺廻しは浪漫的ではあるが、どうみてもお伽話である。

だが、鷗外はそれを承知の上で意識的にこの小説をメルヒエンとして仕上げたのではあるまいか。本稿の當初に觸れておいた通り、「うたかたの記」には、「舞姫」や「文づかひ」の様な深刻な「家庭の事情」がその背景にない。「錫蘭で、赤い格子縞の布を、頭と腰とに巻き附けた男」から買ったとき、フランス舟の乗組員が妙な手附きをして、Il no viva pa と豫言した通り、舟の横濱に着くまでに死んでしまった「美しい、青い翼の鳥」のように、鷗外にとつて、四年に亙る彼地の生活は日本ではもはや望む可くもない「見果てぬ夢」であつたろう。「夢」ならば夢でいい、その「夢」を思い切つた「空想假象」の物語に託して書いてみたい……これが「うたかたの記」を手がけた當時の彼の心情ではなかつたか……こうして「うたかたの記」をメルヒエンと観るとき、こゝに初めて、その下敷として矢張民顯府滯留中に入手して讀んだと想われる「即興詩人」との關連に思い到るのである。

鷗外譯の「即興詩人」に就いては既に島田謹二氏によつて詳細に解明し盡されているので敢て贅言を費す迄もないが、本稿を書き進める上でどうしても島田氏のそれを一部藉りる必要を生じたので、一言お断りして轉用させていただくことにした……

鷗外が猶逸に留學したのはアンデルセンの逝つた直後に當る一八八四年十月から一八八八年の七月にかけてで、既にその名聲は普く猶逸國內に知れ互つていたのであるから、鷗外も彼の作品のいくつかに親しんでいたであろう。而も出世作「即興詩人」の第一部は民顯府で執筆されたものである。現に、「即興詩人」や「O・T」等の猶譯のレクラム本はすべて留學中に購つている。「うたかたの記」が公にされた明治二十三年十二月三十日、忘々生の質問に應えて、「アンデルセンが小説にてはO・T、を愛すること既に言ひしが如し。然れどもこれを除きても、猶「即興詩人」の如きものあり。我坐右を離れざる畫の一に屬す……と云つている。

では、彼は留學中の何時頃、アンデルセンを知つて愛讀するようになったのであろうか。……島田氏は、これを「大體一八八六年初秋以來のこと」と推定している。一八八六年と云えば、スタルンベルヒ湖の悲劇のあつた年である。「この年の三月八日には、ミュンヘンで謝肉祭を觀て、魂天上に飛ぶ交歡も味わつた。七月十五日にはヴェネチアから來た長沼守敬を迎えて、亡き緒方惟直がイタリアの女性に生ませた子供のことにふれて感慨をもらしている。緒方の墓はチミテロ・サン・ミキエルにある。即ち物語の中でアヌンチャタの葬られたことになつているところである。九月三日にはスタルンベルヒに殘暑を避け、兼ねて著述するために赴いたが、業餘に「讀んだ書物の中には文學書も含まれていたであろう。五月以降同湖畔のレオニイに移り、レオニイ客舎に投じている。先に抽出した九月十二日の日記の、カルル夫人との對談で、話がエネチアの事に及んだとき、鷗外が自分の讀んだ書物を擧げて質したとある、その書物に就いては、島田氏も「私の空想には『即興詩人』のことがすぐ浮かんできて仕方がない。」と云つている。鷗外が自から執筆したと想われる「即興詩人」の廣告文には「即興詩人は、又一部伊太利風土記の觀を作すべし。」と記している。島田氏も「ローマをとつても、ナポリを考へても、ヴェネチアについても、その自然、その宗教、その歴史、その音樂藝術、その文學、そうして、その風俗人情があますところなく細寫されている。これを紹介すれば、一篇の『イタリア案内記』となる觀がある。……」と云つて

いる。「即興詩人」のヒーロー「アントニオは千八百五十年頃に生まれ、九歳アラチエリの寺にはじめて美聲を人々の前で試み、十二歳の六月ジェンツァの花祭に母を喪い、十三歳でジェスイタ學校に入り、ベルナルドオと交わつて詩人となり、二十歳の二月謝肉祭の時にアヌンチヤタと相識り、三月復活祭の前後から烈しい戀情に悩み、ベルナルドオを傷つけてナポリに逃れる途中サンタと近づき、フアビアニ公子一行とめぐりあい、ベツスムにララを接吻し、初夏(?)カプリの琅玕洞を見て夏ローマに歸つた。それからボルゲエゼの館で『教育』がはじまる。フラミニアとの戀はアントニオ二十六歳(一八三〇年)の春、テイヴオリに遊ぶのはその年の夏にあたり、間もなく姫が落飾の事あり、傷心の極ヴェネチアに着くのが七月と推される。水都の陋巷でアヌンチヤタに再會し、市長の家でララの後身マリアからこの愛人の最後にのぞんで自ら書きしたためた斷腸の手紙をうけとるのは十一月の頃だろうか。『流離』『心疾身病』の中にアントニオは翌年の一月ヴェネチアに戻り、三月ララと結婚。千八百三十四年三月はじめ琅玕洞再遊の記事によつてこの物語の幕をとじる。」

「こういう事件の推移から判じてもわかるように、物語の構想はやや散漫で、ゆきあたりばつたりである。緊きしまつた骨組の上にびつたりと張つた構成をつくつていない。戯曲的という點からみると、甚だしく物足らない。勿論、作中人物の運命の轉變する仕方がはつきりと描かれている。そういうところは西歐小説の特色を少しも失つてはいないが、それがこの作品の場合には結構のための結構となつて、『デウス・エクス・マシナ』的に荒唐無稽である。それは母を殺したボルゲエゼ老公を助けて、これから恩人となつてもらふところとか、フアビアニ公子との『めぐりあひ』とか、ララの後身をマリアの中に再生させてくれるところとか、幾つかの個所にみとめられる。恐らくこれは大きな善い意志をもたれる『神』のあらわれとしてこの『生』を観るところから生れる彼一流の樂天觀が、こういうハツピー・エンディングを生むようにしなければ我慢しなかつたためかと思われる。このプロットはそれだけにまた強引にもつてゆきすぎて、童話ならばいざしらず、物語としては不自然に陥るの弱味を示すようになったものと考えられる。……」(註、「」内は島田氏の文。)

巨勢とマリイの出逢いに最も近いものをアントニオの戀愛遍歴に求めると、島田氏が「結構のための結構となつて、『デウス・エクス・マシイナ』的に荒唐無稽で』『強引にもつてゆきすぎて、童話ならばいざしらず、物語としては不自然に陥るの弱味を示す』として列擧した中の、アントニオとララ（後のマリイ）のそれに見出すことができよう。

フアビアニ公子の一行に合流してベツスムの村を訪れたアントニオは、「穀神祠」と共に「彼のポムペイ市と同じく闇黒の裡より出で、人の遺志を喚ぎ醒した」「シチリアの希臘古祠海神祠」の柱列を背に、乞焉の群を少し離れたところに、「身を薰高き『ミユルツス』の叢に埋めて、もろ手を項に組み合せ」て立つ、「十二歳を踰えじと見ける」「目しひ」の少女ララを見てその美しさに感動し、「盾銀一つ握らせ」て額に接吻する。この瞽女は「アヌンチャタとなるべき姿にもあらず、さればとて又サンタとなるべき貌にもあらず。前にアヌンチャタが物語り聞きつる、メヂチ家の愛憐神女の像は、かゝる面影あるにあらずやと思はる。實に此少女の清き容は、人をして圍抱せんと欲せしむるものにあらず、却りて膜拜せんと欲せしむるもの」であつた。彼女は、「褐色なる方巾偏肩より垂れたるが、巾を纏はざる方の胸と臂とは悉く現はれ」「雙脚には何物をも著け」ず、「かくはかなき身と生れても、流石に粧ひ飾る心をば持ちたるにや、髪平かに結び上げて、一束の莖花を挿せるが、額の上に垂れ掛」つていたのである。

「うたかたの記」のマリイの「美しき目よりは稻妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨」んだ「時の姿は、莖花うりにも似ず、『ロオレライ』にも似ず、さながら凱旋門上のバワリアなりと思はれぬ。」と評した條は、ララの「すぐれて麗しき」姿を「アヌンチャタとなるべき姿にもあらず……」のそれと、表現に於いて著しく酷似している。また、彼女が「平らかに結び上げ」た髪に挿した一束の莖花は、「うたかたの記」では、マリイの「凍えて赤うなりし兩手さしのべて」縁を持つ「淺き目籠の」「營磐木の葉、敷き重ね」た上に載せた「愛らしく結びたる」「時ならぬ莖花」に置き換えられる。年の頃も、ララと同じく「十二三と見ゆる」少女である。「カフェ・ロリアン」の主人に追い出され「ひとりさめ／＼と泣きてゆく」マ

リイを呼び止めた巨勢は裏中の『マルク』七つ八つありしを、から籠の木の葉の上に置「くが、アントニオの與えた『盾銀』もララにとつては『常の錢』ではなかつたのである。また、巨勢に「わが見し花うり」の姿を、「……伊太利古跡の間に立たせて、あたりに一群の白鳩飛ばせむこと、ふさわしからず……」と語らせるとき、シチリアの希臘古祠の柱列を背にして立つララの姿を鷗外は思い浮かべていなかつただらうか。

「琅玕洞」中夢幻の間に「深紅の花を開ける」薬草を摘んでララに渡すことがあつて後、ボルゲエゼの館で教育を受け、「即興詩人として名を羅馬人の間に知ら」れるようになってからヴェネチアを訪れ、市長の邸でその姪マリアに會うまで、その間六年の歳月が流れる。巨勢とマリイが再會したのも六年の後であつた。

「マリアとララとの相肖たるは驚くべき程なり。さるにても身に襤褸を纏ひて、髮に一束の菫花を挿みし乞焉の女の、能くエネチア第一の美人と美を妬ぶること不思議なれ。」と戸惑うアントニオの心情はまた、「舊びたる鷹匠頭巾、ふかぶかと被り、凍えて赤うなりし兩手さしのべて」「菫花の束を、愛らしく結びたるを載せ」た「目籠の縁」を持ち、「ファイルヘン・ゲフェルリヒ」と、うなだれたる首を擡げもあへでいひし「十二三の少女と、「前庇廣く飾なき帽を被ぶりて、年は十七八ばかりと見ゆる顔ばせ」は「エヌスの古彫像を欺」く程で、「そのふるまひには自ら氣高き處ありて、かいなでの人と覺え」ぬマリイと同一人かどうかを怪み迷う巨勢のそれに通ずる。

ララは、やしない親のアンジェロと共にアントニオが琅玕洞で與えた薬草を煮ようとしている所へ「ロオザ」（市長の妹）が兄なる醫師が彼等の草寮に憩うて、彼女の「目の開くべきを見極め」「拿破里に率て往」き手術が奏功したのが縁で彼の養女となり、「希臘にてみまかりし子の名を取りて、「マリアと呼ばれたのであるが、両親に先立たれて孤兒となつたマリイも「母のなきがら片附けなどするとき、世話せし」「二階高くすまひたる裁縫師に」「迎取られ」たが、その娘は二人とも賣春婦で、彼女もまたスタルンベルヒ湖の舟上で「四十ばかりなる知らぬ」男に犯されそうになり、湖中に身を投げて、ハン

スルという漁師夫婦に救われその養女となる。貧富や生立の相違はあるが、二人共孤兒から養女へと身上が變る。

アントニオは「柑子の花香しき出窓の前に」マリアと「對生」して、「この可憐なる少女の清淨なる口の、その清淨なる情を語るのを聞き」、巨勢は、「エキステルが周旋にて」、借り受けた「美術學校のアトリエ」の一間の「窓の下なる小机」の「いま行李より出したる舊き繪入新聞、遺ひさしたる油糸の具の錫筒、粗末なる烟管にまだ卷烟草の端の残れるなど載せたるその片端に」「つら杖つき」て、「前なる籐の椅子に腰かけ」たマリイの口から情を打ちあけられるのである。浪漫的風情と殺風景の差はあつても心情に於いては共通したものである。

扱て、この儘アントニオとマリアの倅せに即して行けば、「うたかたの記」の結尾は、縫れ合つて湖中に沈み行く二人の姿を憑れたように凝視しながら巨勢に身を倚せて小舟上に呆然と立ちすくむマリイ……ということになるのだが、鷗外の心情からすれば、叶わぬ戀の相手もはや故人となつてゐるとは知る山もなく、かつての彼女を戀慕し續けて來た王が、彼女ならぬ彼女に生寫しの彼女の娘を彼女と思ひ込んで、彼のロオレイの妖女に招き寄せられるように入水する……ロオレイの妖女と現實の乙女が漸く重なり合つたのも束の間、この薄倅の少女は彼の前から永遠に姿を消して、畫布の上のロオレイの妖女は「見はてぬ夢」として殘る……どうしてもこうしなければならなかつたのである。

拜焉の女神パワリアは物の怪に憑かれたようになった時のマリイの象徴として三度效果的に使われているが、ロオレイの妖女が、巨勢とマリイの間、マリイとルウドキヒ第二世との間を繋ぐきづなとしての役割を果していることも看過できない。

最後に、かつて「命喪はむと」して「命拾ひし」湖、己が眞心打明くる所はこの湖こそ相應しと思ひ定めて驟雨の「繁く」「湖上より」横にしぶく中を母衣をも掛けで無二無三に馬車を驅りつつ、しかも、眞は、一度は逸したる贅を此度こそ把えんとて水の神の待ち受くる湖とも豫知していたかのように、だが、まさかに、嘗て母を悲境の裡にみまからしめた狂王

の、今またその娘である己が身柄を水の神に引渡す下邊の使とならんとして待受ける湖とは露知らず、巨勢に呼びかけたマリイの言葉……「人生いくばくもあらず。うれしとおもふ一彈指の間に、口張りあけて笑はずば、後にくやくしくおもふ日あらむ……けふなり。けふなり。きのふありて何かせむ。あすも、あさても空しき名のみ、あだなる聲のみ。」……「うたかたの記」全篇に漂う哀感を集約したかに思われるこのマリイの言葉をもつて本稿の結びとする。